ラグビー元日本代表
SAMURAI SEVEN（サムライセブン）代表
吉田 義人

●よしだ・よしひと
1969年生まれ。男鹿市出身。秋田工業高、明治大学主将として共に全国優勝。19歳で日本代表入り。世界の15人に3度選抜、オールブラックス戦でのタイビングトライは世界ラグビー史上伝説となる。伊勢丹で社業キャリアを積みながら筑波大学大学院でスポーツ教育修士号取得。31歳でフランスに渡り日本人初の1部リーグプロラグビー選手となる。現役引退後、横河電機ヘッドコーチとして全勝優勝しトップリーグに昇格させる。社内では最年少部長に抜擢。その後明治大学ラグビー部監督就任。14年ぶりに対抗戦優勝を果たす。2016年リオ五輪から7人制ラグビーがオリンピック種目となり、7人制ラグビーチーム『サムライセブン』を立ち上げる。現在、監督として選手育成しながら、テレビ解説、講演会、ラグビークリニックなど全国でラグビー普及に取り組む。

自然、環境、食…古里の恩恵に日々感謝

私の生まれ育った秋田県男鹿市脇本、そこは男鹿半島の南側にあたり、風光明媚な寒風山の麓だ。小さい頃からとにかく外で遊ぶのが大好きな子どもで、相撲はよくやっていたし、野球、サッカーも好き。そして時にはけんか、近所の子どもたちを束ね、学校が終わると毎日みんながうちに集まっていた。「今日は何して遊ぶ？」「海行こう！」「サッカーやろう！」「今日は野球！」みんなが口々に言う。そんな地域の子どもたちの底知れぬエネルギー源は何と言っても地元のお米だろう。秋田はまず空気が抜群にウマイ。そして水もおいしい。そんな恵まれた環境で育った秋田米は抜群に甘味があり、ふりかけやオカズは邪道なほど、米そのものの味わいが豊かだと思っている。実家では畑を耕し、キュウリ、ナス、トマトなど野菜もいつも新鮮に頂くことができて、育ち盛りの子どもにとって、田舎者ながらも幸せな食育であったと振り返る。

ラグビーを始めたのは9歳のときだった。男鹿半島は、日本のウェールズと呼ばれるほどラグビーの盛んな地域だ。そして、私が生まれ育った男鹿市脇本には、少年野球チームもサッカー教室もないのに「脇本おいばなラグビースポーツ少年団」というラグビースクールがあった。脇本には農協もご近所にあり、地元民は皆、昔からなじみがある。ある年の冬、いつものように裏山で遊んでいた私たちのところに、友達が見慣れぬ楕円のボールを抱えて現れた。「よっちゃん、今日はこれやろう」聞けば、その友達は「脇本おいばなラグビースポーツ少年団」に入団したばかりで、そのラグビーとやらは、ボールを持って走り、パスを回し、ときには相手と取っ組み合うスポーツだと理解した。冬ならスキー、と相場は決まっていたが、友達の話にそそられた私たちはスキーを脱ぎ、一面雪に覆われた田んぼに繰り出した。1ヘクタールくらいの広さの田んぼは、今思えばちょうどジュニアのラグビー場くらいの大きさ。友達に教わりながら、見よう見まねで走り回った。野球やサッカーなどの球技が得意で足が速かった私だが、さらに相撲の強さまで生かせると知り、たちまち夢中になった。ボールを抱えて走り、相手を抜き去る。誰かが飛び付いてくるぎりぎりまで待って味方にパスを出す。そしてボールを持った相手をつかまえる。どの瞬間も、自分にぴったりの競技だとたちまちのうちに感じていた。気が付けば、ボールが見えないほど、あたりは暗くなっていた。その日、家に帰ってすぐに母に願い出た。「母ちゃん、おれ、ラグビーやりたい！」その時の母の驚いた顔は、今も憶えている。ラグビーをやりたいことに驚いたのではなく、私の顔に驚いたのだった。私は鼻血を流し、その血が顔じゅうに付いて凍り、顔も服も血だらけだったらしい。それがわたしのラグビー人生のはじまりだった。

大学進学と同時に上京してから関東で長年暮らすことになった今、自然の恵みから授かった素材のぜいたくさをひしひしと感じている。小学1年生の息子の父となり家庭を持った今も、米は実家から欠かさず送ってもらっている。そして、我が家に友人や選手が集まった時には、天然記念物である秋田直送の比内地鶏鍋のレシピをすっかりモノにした関東人の妻がこしらえ、秋田米をこねてだまこもちを作る係は息子である。役割を与えられた息子は、大好物をもてなす喜びを7歳ながらに身に付けてくれた。小さい頃からおもてなしの心を育てたいと思っている。ゲストが口にした瞬間、ほっぺたが落ちるような満面の笑みでその極上の味わいに感動してくれる姿を見るたびに、私の故郷が秋田であることに、心底感謝している。

子どもたちにラグビーの指導をしている様子